

特集2

2022年 第13回 高校生の 建築甲子園



テーマ
地域のくらし
——これからの地区センター——

主催
公益社団法人 日本建築士会連合会
都道府県建築士会

後援
公益社団法人 全国工業高等学校長協会
国土交通省

建築甲子園全国選手権大会 審査委員会
審査委員長
片山和俊(東京藝術大学名誉教授)

審査委員
竹江文章(教育・事業本委員会委員長)
山本道善(青年委員会委員長)
本間恵美(女性委員会委員長)
伊東龍一(まちづくり委員会委員長)

次期審査委員長
堀 啓二(共立女子大学教授)

総評 片山和俊 | 審査委員長、東京藝術大学 名誉教授

まだコロナ感染が収まっていない時期に、場合によっては現地調査や共同作業が必要になる作品づくりはどうだろうか心配していたが、全国から多くの力作が届けられて良かった。今年度の参加は35校。第1次作品審査は11月7日に行い、11校を選定した。審査は初期に行っていたトーナメント方式ではなく、昨年と同様一般的な方法で行った。全作品を審査委員全員で順番に意見を交わしながら見た後、ABCの3段階評価で各自採点を行った。その結果を前に、意見交換をしながら2次に進める作品を選定した。プレゼン動画を依頼することとしたのは11作品。昨年度より作品数が多かったのは、それだけ評価が分かれていたことによる。

最終審査は約1カ月後の12月12日。各校から提出されたプレゼン動画を見た後に、委員相互の意見交換を経て投票した結果、おおよそ優勝・準優勝が見えてきたが、最終的には話し合いにより各賞を決定した。

各地の過疎化が進み、少子高齢化、働き手不足やシャッター街の発生などは、日本全国どこも同じ状況にある。その困難な状況下で、自分たちが暮らす地域で何ができるか、どういったコミュニティセンターが可能かという問いが今回のテーマである。まだ社会経験も少ない高校生諸君には荷が重い難しい課題であった。それだけに、今回君たちから寄せられた「そうか!」と思わせる提案やアイデアの数々には頼もしさを感じた。評価が分かれたのは、我々が専門とする、これからしようとする建築的な面の提案のあるなしとその中身で、具体性や説得力があるかどうかであった。前半のコンセプトやプレゼン動画の演出が面白くても、その先の空間的なレベルでの提案に繋がっていかなくては意味がない。審査結果から見返すと、建築への拘り、そこから生まれた魅力が鮮明で強かった順に優勝、準優勝校、各賞が決まったように思われる。

最後に、今回困ったことを付け加えておきたい。実施・応募要項にプレゼン時間5分程度とあるにも拘らず、3校が大幅に超過していたことである。審査の公平性を期すために2段階に分けて、超過校の審査の可否を判断せざるを得なかった。結果としては長いことが有利に働くような内容ではなかった。今回校名を明らかにすることはしないが、要項に書かれていることは常識の範囲で守って欲しい。「程度」という文言がなければ、通常のコンペなら落ちる。また何回も言っていることだが、応募のCAD図面は文字が小さくなりがちである。プリントするA3判で読みやすい文字の大きさと量に気を配って欲しい。これも読む相手を気遣う常識の範囲だが、多くの場合量を絞ったほうがわかりやすくなる。